
夜の果て

蓬よすが

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の果て

【Nコード】

N1982S

【作者名】

蓬よすが

【あらすじ】

決められた日に死んだその人物の魂を狩る
それが欠陥製品
と呼ばれる彼らの仕事だった。

ある日、シャホールは男から仕事を与えられた。今回の相手は井波千代という少女だった。
いつも通りその魂を奪おうとシャホールは少女を決められた期限まで見守ることにしたが。

欠陥製品・シャホールと少女・千代が邂逅を待っていたかのように

紡がれる物語。二人の恋は実るのか、果たして。

欠陥製品物語第一弾、夜闇のシャホール。

『全ては神の御心のままに。』

少し修正しました。また変更するかもしれません。

前置き（夜の始まり）

二十五階立てのマンションから眺めると、煌びやかすぎて眩しく感じた街の光も、まるで宝石が光を反射させた時のような輝きを見せている。

一人の少年が屋上から見える夜の街を眺めていると、一陣の風が吹き荒れた。夜に馴染む黒髪がその風に靡いて揺れる。

髪が落ち着いた頃、少年以外誰もいなかった屋上に男が現れた。その男は、夜には馴染まない白スーツを着ていた。

「シャホール」

白スーツの男は少年をそう呼んでいた。何故その名前なのか。分からないが、少年シャホールにとってはどうでもいいことだ。白スーツの男はいつものように柔らかな笑みを浮かべていた。

「なんの用だ」

「いつもと同じですよ。仕事を与えに来ました」

男はシャホールに書類を渡した。その書類には一人の少女の写真と個人情報に乗っていた。

「今回は簡単な仕事ですから、あなた一人で行って貰います。たかが少女一人だけですから」

「…珍しいな、お前がそんな言い方をすると」

男の最後の台詞が少し荒々しかった。シャホールはそのことに気づいた。

この男とは長い付き合いになるが、誰に対しても上品に接している。人を馬鹿にしたような言葉を聞いたのは今回が初めてだった。

男は何食わぬ顔で言った。

「そうですか？別に、その少女を特別注意する要素なんて全然ありませんけど」

「……………」

男の言葉に少年は眉を顰める。言い方が不愉快だからではない

この男が言うからには、少女には注意しなければならぬからだ。

写真をもう一度見たが、やはり普通の少女だ。一体何に注意しなければならぬのだろう。

首を傾げているシャホールを目の端に入れて、男は青年に背を向けた。

「では、私はこれで」

「待つ」

シャホールは引き止めようとしたが遅かった。少年が白スーツの男を視界に入れたのは一瞬だけだった。

男は風と共にその場から去ってしまった。

太陽の光ではない光が夜を照らしている。

「井波千代……」
いなみ・ちよ

どんな少女なのだろうか　否、例えどんな少女でも少年は仕事を
しなければならぬ。

それが、シャポールら欠陥製品に課せられた使命なのだから。

少年は屋上を後にした。街は相変わらず煌びやかだった。

続く

第一話（宵闇が近づく夕刻）（前書き）

死の描写がありますが、あまりえげつない書き方はしていないと思います。

どうしてもアウトだと思ったなら、感想でお伝え下さい。

第一話（宵闇が近づく夕刻）

暦の上ではまだ夏は始まっていないが、午前は日差しが強かった五月三十日の今日。

現時刻は午後六時前。

太陽は未だ沈まずに地平線から顔を出しており、光が橙色に変わり始めていた。

千代は腕時計を確認しては、目の前の信号が青になるのを今か今かと待ちわびていた。

千代の住む学生寮では、寮長からの許可がないと外出が出来ない決まりになっている。

千代はきちんと許可を取っていたが、今日七時から見たいテレビ番組があることをすっかり忘れていたのだ。

焦りのせいで心臓がどくどくと脈打つのが分かったが、車が隙を見せずに次々と走り去る中を渡ることなど出来るはずもなかった。

そんな中、千代は歩道橋の向こう側にロシアンブルーの猫を見つけた。ほっそりとしているが骨張ってはいない美しい猫だ。

猫は歩道橋を渡りたがっている様子で通る車を目で追っていた。

そんな猫に釣られて千代も左右を繰り返し見て確認すると、反対車線を通る車の波が止まった。

猫は数人の人が通っていくのを見てから同じように中間まで渡る。

千代は時間を気にして猫から目を離した。

その途端、トラックが飛び出して来た。

驚く暇もなく、トラックはスピードを出して猫に近づいていた。猫は反対側から車が走ってくるとは知らずに、呑気に欠伸をしている。

千代は飛び出した。

後ろから誰かの声があったが、誰の声かは分からなかった。

千代は申し訳ないと思いながら猫を飛ばす。猫は吃驚していたがすぐに身を翻し、中間地点に着地した。

それを確認して千代が詰まらせた息を吐こうとすると、体の左半身に衝撃がきた。

体が飛んだ。どこまで飛ぶのだろうと思う程の飛躍感を感じた。そして、体が落ちた。

痛くはなかったが、体に力が入らない。無理に動かしてみたら視界が赤くなり始めた。その視界に猫が移る。

どうして助けたのだろう。スーパーマンにでもなったつもりだったのだろうか。

ああ、でも。

生きてて良かったね、ねこ。

千代は心の中で猫に呼び掛けた。赤い世界が霞んでいく。

千代は目を閉じた。

きっと私は、見合いで結婚するんだと思った。

旦那さんの顔は平凡でもいいから、優しくて、気配りが上手で、私を大切にしてくれて、自分自身のことも大切にして　　そんな人に愛されて、私も愛して。

そんな幸せが欲しいなって思って。

そんな幸せがあるんだと思ってた。

どうして私、猫一匹のために人生を捨てちゃったんだろう。
私にとつたら、猫一匹と私の人生なんて比べられない程かけ離れているのに。

馬鹿な私、どうしてこんなに清々しい思いをしているの。

死にたくない。まだやりたいことも沢山あるのに。今日の番組も見れてないのに。　　なんだか胸から重りが無くなったような気分だ。

このまま逝けたら、幸せなのだろうか。

いや、やっぱり死にたくないなあ。

千代はそう思った。

『なら、生かそう』

暗闇の中で男の声が聞いた。

真っ黒な何か近づいてくる　　千代にはそれが人だと分かった。

やがて、目と口元以外を隠した仮面を装着し、黒いマントに身を包んだ男が見えた。

まるでフロントムミみたいだと千代は思わず笑ったが、男はそんな千代に何の反応もしなかった。

男は続けた。

『きつと今まで通りの生き方を望んでいるだろうが、それはお前がんだことよって叶わない。容姿や記憶などはそのままだが、お前

の友も親も他人になり、違う場所で生き、違う生き方をすることになるだろう』

その言葉の意味を理解しても、千代の頭には“死にたくない”の一言しか浮かばなかった。

男は白い手袋を嵌めた手を千代に差し出してこう言った。

『それでも生きたいなら、俺の手を取れ』

千代は迷うことなく男の手を握った　　手袋越しに、男の体温を感じた気がした。

とても温かった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1982s/>

夜の果て

2011年10月8日12時37分発行